

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	山本 浄邦（邦彦）（大阪）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 8 2 号
学位授与の日付	平成 2 7 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	光州実業学校の研究 一大韓帝国期における日本人仏教者の社会事業からみた東アジアの近代一
論 文 審 査 委 員	主査 李 昇燁（佛教大学准教授） 副査 清水 稔（佛教大学教授） 副査 松田 利彦 （国際日本文化研究センター教授）

〔 1 〕 論文の概要

本研究は、大韓帝国期に全羅南道光州において真宗大谷派（東本願寺）によって設立された光州実業学校の設立・運営をめぐる人々の動きを探るもので、それによってこの時期の東アジアにおけるトランスナショナルな人々のつながりのなかに見出される、さまざまな近代＜が絡まりあうさまをあきらかにし、19 世紀末から 20 世紀初期の東アジアにおける近代の一様相を分析したものである。

論文の構成は以下の通りである。

序章

- 第 1 章 近代日本における政教関係の成立と真宗大谷派の朝鮮布教
- 第 2 章 大韓帝国期光州における奥村兄妹の真宗布教・実業学校設立
- 第 3 章 危機、「裏面の目的」、そして衰退
- 第 4 章 尹雄烈と光州実業学校一学校設立協力の背景をめぐって
- 第 5 章 近衛篤磨と光州実業学校
- 第 6 章 「柳林藪」をめぐる葛藤の分析
- 終章 研究の総括

以下、各章の内容を摘要する。

序章では、本論文で用いる「近代」という概念を定義している。ある与えられた状況に対して、これを変革しようとする人々のプランを＜近代＞、＜近代＞の実践を＜近代＞化、

それが実現した実際の制度や体制を近代と表記して区別しているが、これは個々のプランとしての＜近代＞が衝突・協力・妥協しながら歴史的事実・実在としての近代が展開していく様子をより明確に描くための方法論として提起されたものである。

第1章では光州実業学校の前史としての近代政教関係および真宗における「近代教学」の成立、そして真宗大谷派の朝鮮布教について概観し、近代政教関係の成立を明治維新以降の政府の政策と仏教界の動きから考察した。真宗教団が明治期日本の宗教体制（国家神道の成立と信教自由の認定）に沿って、近代天皇制国家の統合原理を主体的に担う「近代教学」を成立させた結果、真俗二諦にもとづく国家への「報恩」としての朝鮮布教が実践されたことを明らかにした。

第2章では奥村兄弟によってはじめられた光州における真宗布教と実業学校設立および初期の運営過程を『明治三十一年韓国布教日記』や日韓の公文書などを用いて、背景にあった真宗教義や日本の政界の動向なども視野に入れて考察し、先行研究の通説を再検討した。兄妹の活動を政治的に支えたのは、近衛篤麿・二条基弘らの率いる貴族院内会派の三曜会・懇話会、そして衆議院内の大隈重信をはじめとする非藩閥系・対外硬派の政界のネットワークであったこと、現地民衆の「激しい抵抗」が学校閉鎖の直接の原因ではなかったことを明らかにした。

第3章では奥村兄弟が帰国する1899年前後から閉鎖までの学校運営について、その経緯と衰退過程を外交史料などによってあきらかにした。当初「宗教と教育の力」による現地の人々への懐柔を目的として出発した光州実業学校は、次第に日本農民の殖民を「裏面の目的」とするようになっていくが、その背景には朝鮮半島をめぐる国際情勢や、日本の政治・軍事的目的が存在していたことを論証した。

第4章では奥村兄妹を受け入れた全羅南道觀察使・尹雄烈の対日協力の行動と意図を分析した。尹雄烈は、光州実業学校が韓国の近代化に資するものであり、信頼していた日本外務省や大谷派によるものであったので、協力したが、それは同時に実業学校側の植民地主義的意図に対する協力でもあったことを論じた。

第5章では貴族院議長で実業学校の総裁となった近衛篤麿に焦点をあてた。「皇室の藩屏」を自負する近衛篤麿にとって光州実業学校は、みずからの使命として取り組んだ政治家そして教育者としての手腕を発揮しつつ、アジア主義者として東アジア各地に活動の場を拡大させる契機となった事業であったことを明らかにした。

第6章では、光州実業学校の「目的」＝柳林藪開墾による農業移民を実現させるために具体的にどのような障害があったのかをあきらかにすることで、実業学校関係者の＜近代＞の限界とともにこれを阻む側の＜近代＞について考察し、そこから実業学校衰退・消滅の具体的要因を探った。両者の葛藤は水防機能を中心とした柳林藪の精神的・実用的機能の破壊を阻止しようとする光州の人々に対し、柳林藪のそのような機能に思いがいたらず、広大な「荒蕪地」として考えていた実業学校・日本外務省の認識に起因するものであったことを明らかにした。

終章では、6章にわたる分析の総括として、真宗大谷派の奥村円心・五百子兄妹による光州実業学校の事業が大韓帝国期において日本国家とどのような関係をもち、どのような目的のもとで事業が展開され、これが韓国の国家や現地の人々にどのように受容／拒絶されたのかをあきらかにすることで、従来のような仏教史や教育史といった枠組みを超えて広

く近代史、トランスナショナル・ヒストリーの文脈の中に位置づけることが出来たと結論づけている。

〔2〕 審査結果の要旨

真宗大谷派（東本願寺）の奥村円心・五百子兄妹の朝鮮布教は、近代日本仏教による最初の朝鮮布教の事例として注目されてきた。その具体的な実践の一つであった光州実業学校についても数本の研究成果が出されているが、史料利用や解釈、そして視点の側面からさまざまな問題点を伏在させたまま通説となっていた。なお、近代日韓関係における仏教の問題は、最近「帝国史」および「植民地近代」の文脈から検討される傾向があるが、その問題意識の有効性にも拘わらず、批判と再検討を要する部分も少なくない。本論文は、かかる先行研究の方法・実証にわたる限界と問題点の克服を狙い、斬新な方法論を提示した上で、新史料を含む一次史料に基づいた実証的再検討を行い、著者自身が設定した課題を解決し、新しい歴史像の構築に成功していると考えられる。以下、本論文で高く評価すべき点について述べておく。

第一に、研究方法論における根本的検討が行われた点である。著者は、ユーロ・セントリズムの近代観そのものに対する異議を唱え、独自の「近代」概念を提案している。すなわち、「近代性」という「本質」を中心に置き、その「近代性」の顕現として「近代」という時代を捉える観念から脱却して、新しい世界体制に対する自己革新のプランとしての〈近代〉、その実践過程としての〈近代〉化、そしてそのようなく近代〉が絡み合う「場」としての近代という、概念の再構築を行ったのである。これは東アジア（とりわけこの論文が対象としている朝鮮近代史・日韓関係史）を見る視点を転覆しようとする挑戦的かつ野心的企画として評価される。著者によって再定義された近代概念は、「帝国史」や「植民地近代」論のパラダイムが日本の朝鮮植民地支配を前提としているため陥らざるを得ない限界、すなわち植民地以前の近代を捉え得ないという、「自主的近代化」の時期と「植民地近代」の時期の認識的断絶を克服する視点としての有効性が認められる。また、近代性（＝本質）ではなく、近代という「場」の中にいる主体たちのプランと実践から〈近代〉概念を構築することによって、「植民地近代」論をめぐって繰り広げられた不毛の論議から解放され、主体の活動と相互作用によるダイナミズムの中から歴史像を探る一つの可能性を提示したといえる。

第二に、多様な方法論を駆使して、光州実業学校の設立と運営の背景と実態について、立体的に眺望し、既存研究が持つ限界の克服を試みた点である。つまり、先行研究では真宗教義の理解を欠如した社会史・教育史だけの視点や、日韓関係や朝鮮近代社会に関する理解を欠如した仏教史の叙述も少なくなく、また日本史と朝鮮史、相手側の歴史的な文脈を読み取れず、一方の視点で記述されてきた傾向がある。著者は、政治（外交）・社会・教育・宗教といった様々な観点を統合し、更に人文地理学の方法論をも活用して、インターディシプリンな歴史叙述を試みる一方、日本史と朝鮮史を縦貫するトランス・ナショナルな歴史の構築に挑み、相当の成果を上げていると評価される。

第三に、光州実業学校をめぐる様々なアクターの世界観と動因を追究し、それぞれの実践が絡み合うダイナミズムの中で立体的な歴史像を描き出している。これは前記第一で言及した、変革のプランとしての〈近代〉という著者の方法論が実際の分析で活用された結

果でもある。今まで光州実業学校に関しては、その主宰者である奥村兄妹のみが注目され、その他のアクター、すなわち資金支援を行った外務省や、日本政界側の近衛篤磨・大隈重信、朝鮮側の尹雄烈などは、単なる脇役、もしくは背景としてしか位置づけられてこなかった。また、光州現地の民衆は客体として、または朝鮮側のナショナリズムの表象としてしか描かれてこなかった。著者は、それぞれが持つ変革プランとしての〈近代〉に着目し、認識・利害を異にする複数のアクターたちが、如何にして相互作用し、光州実業学校という同床異夢の実践の場を形成し、また没落していったのかを動的・立体的に描くことに成功した。

第四に、新史料の発掘・利用を通じて、光州実業学校に関する新事実を究明する一方、今までの通説の誤謬を克服することが出来た点である。著者は綿密な調査を通じて、寺院所蔵の『韓国布教日記』・『金蘭集』を発掘する一方、外務省外交史料館やソウル大学奎章閣などから曾て研究に活用されたことのない史料を多数発掘して実証を行っている。また、現地調査や古地図・地誌資料の活用により、人文地理学の方法論を援用したことも注目される。

全体的に充実した史料調査と実証に基づいた、完成度の高い論文であると同時に、新しいパラダイムを提起するなど、挑戦的・野心的な企画でもあり、その意義を充分評価することが出来る。ただし、その一方で、今後更なる検討を通じて発展の展望を探るべき点も指摘された。

まず、著者の野心的な問題提起である〈近代〉概念の再規定が持つ問題点である。著者は「近代性」という「本質」から近代を探るユーロ・セントリズム的な近代概念の解体・転覆を試み、近代という「場」から演繹して〈近代〉を捉える視点を提案しており、「反近代」的思想・運動をも、近代という時代に対する対応として〈近代〉と規定している。

「近代性」の本質論に対する批判の意図には充分共感できるが、果たして「近代性」概念そのものの解体は可能だろうか。また、それは如何なる有効性を持つのであろうか。なお、この〈近代〉概念により、植民地以前と以後における朝鮮近代を連続的に認識する可能性を提案したことには意義があるが、本論文はその前半部（植民地以前）のみを対象にしているため、新しいパラダイムは、今後更なる実証研究を通じて検証される必要がある。

二つ目に、この論文では光州実業学校に関する通説の批判と新事実の発掘を行った点で意義を持つが、いくつかの重要な論点を検証することに叙述が集中しているため、奥村兄妹の朝鮮布教活動および光州実業学校の全期間にわたる運営内容については省かれた部分が多く、その全貌を描いているとは言い難い。今後の研究で補い、より完全な構成を期する必要がある。

三つ目に、さまざまなアクターの行動が連関・交錯する過程について見事に描き出しているが、更なる研究を要する部分もある。たとえば光州実業学校の後援者であった近衛篤磨の朝鮮観のみが取り上げられたが、中国問題に関する視点を含む、広いアジア認識の中で考察を深めていくことが要求される。また、当時日本にいた韓国人亡命者たちに対しても、奥村兄妹の韓国観形成への影響やネイティブ・インフォーマントとしての役割などに注意を払う必要があるのではなかろうか。

以上の通り、本論文は斬新な方法論と一次史料の発掘・分析といった誠実な実証を通じて、光州実業学校という事例から、19世紀末～20世紀初頭の東アジアにおける近代の一

様相を描くことに成功しており、完成度の高い研究として構成されたと評価できる。なお、著者の問題意識と実証内容は今後関連研究に資するところが多いと思われ、その学術上の価値が認められる。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。